

第十七章 貿易経路の予期せぬ変化

大工業国は、資本をある用途や部門から別の用途や部門へ移す過程で、一時的な逆風や予期せぬ事態にとりわけさらされやすい。農産物の需要は安定しており、流行や偏見、気まぐれに左右されにくい。食料は生命維持に不可欠で、その需要は時代や国を問わず持続する。一方、製造品は事情が異なる。特定の製造品への需要は、必要性に加え、購買者の嗜好や気まぐれの影響を受ける。新たな税が導入されれば、その国がそれまで特定の製造品の製造で有していた比較優位が損なわれることがある。戦争の影響で、その輸送にかかる運賃や保険料が上昇すれば、従来輸出していた相手国の国内製造品と競争できなくなる場合もある。こうした局面では、その製造に携わる人々には大きな困難と少なくない損失が生じる。しかも、その影響は変化の瞬間だけで終わらず、資本や労働力のある職や産業から別の職や産業へ振り向ける全期間にわたって続く。

困難は原因となった国にとどまらず、その国の産品の輸出先の国々にも及ぶ。輸出と輸入は車の両輪であり相互に支え合い、一方だけを長く続けることはできない。したが

つて、通常の量の外国品を恒常的に輸入できなくなれば、従来の輸出向け生産の一部は縮小せざるを得ない。同じ資本が稼働する限り国内生産物の総価値は大きくは変わらな
いが、供給の潤沢さは損なわれ、価格は上昇し、雇用の移行に伴う困難が広がる。たと
えば輸出用の綿製品に一〇、〇〇〇ポンドを投じ、見返りに毎年、価値二、〇〇〇ポ
ンドの絹の靴下を三、〇〇〇足輸入していた場合、対外取引が途絶えれば資本を綿製品か
ら引き上げて国内の靴下製造に振り向けることになる。資本が毀損されなければ二、〇
〇〇ポンド分の靴下は得られるが、その数量は三、〇〇〇足ではなく二、五〇〇足にと
どまる可能性がある。資本の組み替えには多くの困難が生じうるものの、国全体の富の
価値が大幅に損なわれるわけではなく、年々の産出の数量は減少するかもしれない。

長い平和の後に戦争が始まるときや、長い戦争の後に平和が訪れるときには、通商や
貿易、取引は総じて大きく乱れ、深刻な打撃と困難が生じる。各国の資本の配分や投資
の対象は大きく入れ替わり、新しい状況のもとで最も有利な配分や配置に落ち着くまで
の間は、固定資本が稼働せずに遊休化し、ときに全損に至ることもあり、労働者は十分
に雇用されない。この苦境の長さは、長年慣れ親しんだ投資先や運用形態を改めること
への抵抗や忌避の強さに左右され、さらに商業共同体を構成する各国の間に広がる不合

理な猜疑心が生み出す各種の規制や禁止が、しばしばその期間を延ばす。

商取引の急変による困難は、国民資本の減少と社会の後退に伴う困難としばしば混同されるが、両者を明確かつ厳密に区別するための指標を示すことはおそらく容易ではない。

戦時から平時への移行に直ちに苦難が伴う場合でも、その原因の存在がわかっていなければ、労働を維持するための資金は大きく損なわれたのではなく、通常の流れから一時的に逸れているにすぎないとみなすのが妥当である。したがって、一時的な苦難を経れば、国民経済は再び繁栄へと前進すると見込める。社会が後戻りすることは本来不自然だという点も留意すべきである。個人は成長し衰え、やがて死を迎えるが、国家の歩みはそれとは異なる。活力が最盛に達した段階でその後の前進が阻まれることはあり得ても、富と人口を減らすことなく世代を超えて存続するのが自然な傾向である。

機械に巨額を投じる富国では固定資本の比重が相対的に高く流動資本の比重が低いため、人の労働により多く依存する貧国に比べ、貿易や商況が反転した局面で深刻な困難に直面しやすい。資本の引き揚げは固定資本よりも流動資本のほうがはるかに容易で、特定の製造向けに据え付けられた機械はしばしば転用が不可能である一方で、ある職の

労働者を支える衣食住は他の職の労働者の生活維持に振り向けられ、同じ労働者が職を替えても同じ衣食住を受け取れる。とはいえ、これは富国が受け入れるべき不利益であり、貧しい隣人の小屋が難を免れているからといって自分の船が海の危険にさらされていることを嘆く富裕な商人の不満が正当化されないのと同様に、それについて不平を言うのは合理的ではない。

こうした偶発要因の影響はわずかでも、農業は例外ではない。商業国で戦争が起きれば国家間の通商は遮断され、低コストの産地から生産条件の劣る地域への穀物輸出はしばしば止まる。その間は農業に平時を上回る資本が集まり、輸入に頼っていた国も外部に頼らず自給できるようになる。ところが終戦とともに輸入の障壁は取り払われ、国内生産者にとって破壊的な競争が始まり、土地に投下した資本の多くを犠牲にしない限り撤退できない。そこで国家の現実的で妥当な対応は、年限を区切って外国産穀物に遞減的な関税を課し、国内生産者が土地から資本を段階的に引き揚げる時間と余地を確保することである。これは国全体の資本配分として最善とは限らないが、輸入途絶の局面で食料供給を支えた層の利益にかなう一時的な課税として正当化できる。もし非常時に投下した資本が、平時への移行時に破綻の危険によって失われかねないのであれば、資本

はその用途を敬遠するようになり、農家は通常利潤に加えて突発的な輸入再開のリスク補償を求めるため、供給を最も要する時季の価格には、国内生産の割高分に加えてこの保険料が上乘せされる。結局、安価な穀物の受け入れは資本の犠牲を伴っても国富の増加に資するが、数年間は関税を課するのが妥当といえる。

地代の問題では、穀物の供給が増えて価格が下がるたびに資本は劣等地から引き揚げられ、その時点では地代を生まないより良い土地が基準となって穀物の自然価格が決定される。価格の目安としては、一クォーター当たり四ポンドのときは番号六が耕作される土地となり、三ポンド一〇シリングのときは番号五、三ポンドのときは番号四がそれに当たる。価格が持続的に三ポンド一〇シリングまで下がれば番号六への資本投入は打ち切られる。番号六は四ポンドのときにだけ地代なしで通常利潤を確保できたにすぎないためであり、資本は番号六で生産されていた穀物の全量を輸入で購入するための製品の製造へと移る。この移動はそのほうが所有者にとって収益性が高い場合にのみ起こる。地代なしでの耕作で得られる穀物の量が、製造品で購入できる量を上回る限り、価格は四ポンドを下回らない。

資本は、施肥や囲いの設置、排水など、土地と不可分で回収不能な費用の形をとるた

め、土地から引き揚げられないという見方がある。これは一部事実ではあるが、牛や羊、干し草や穀物の備蓄、荷車といった資本は引き揚げることができ、穀物価格が低迷していても、それらをそのまま土地で使い続けるか、売却してその価値を他の用途に振り向けるかは、常に採算に基づいて判断される。

仮に前提通り資本のいかなる部分も引き揚げられないとする。農民は販売価格の高低にかかわらず同じ量の穀物を作り続ける。減産に利はない。このように資本を用いなければ、そこからは一切の収益も得られないからである。穀物は輸入されない。農民は売れ残すくらいなら三ポンド一〇シリング未満でも売るが、仮定上、輸入業者はその水準を下回っては売れない。したがって、この等級の土地の農民は産品の交換価値の下落によって不利を被る。では国全体はどうか。各種財の生産量は変わらず、粗生産物と穀物の価格だけが一段と下がる。国の資本は保有する財から成り、それらが以前と同じである限り、再生産は同じ速度で続く。ただし、穀価が低いと第五等地では通常利潤しか得られず、地代は生じない。より良い土地の地代は下がり、賃金は下落し、利潤は上昇する。

穀物価格がどれほど下がっても、資本を土地から移すことができず、需要も伸びない

限り、国内の生産量は以前と同じ水準にとどまるため、輸入は行われない。生産物の分配は変わり、利益を得る階層もあれば不利益を被る階層も出るが、総生産の規模は変わらず、国全体としての富も増えも減りもしない。

しかし、穀物の相対価格が低いときには常に次の利点がある。生産物の分配は賃金基金をより拡大しやすく、というのも、利潤として生産階級に配分される取り分が増え、地代として非生産階級に配分される取り分が減るからである。

資本を土地から引き揚げられず、投じるか全く用いないかの二択しかないとでも結論は変わらない。まして資本の大半を移せるならば、残すより移すほうが所有者の利益にかなうときのみ、しかも所有者と社会の双方にとって資本が他所でより生産的に用いられると判断できるときに限って移転は起こる。土地と切り離せない部分については回収不能になるのを受け入れる。持ち出せる部分を運用して得られる価値と産出量が、この部分を捨てずにおこうとして資本を据え置く場合を上回るからである。巨費を投じて据えた機械が新発明や改良で旧式化し製品の価値が下がったとき、旧機の価値をすべて失うことになっても新機に替えるか、性能の劣る旧機を使い続けるかは、冷静な計算で決まる。旧機の価値が損なわれるからといって、優れた新機の導入をためらえと主張

する者はいない。にもかかわらず穀物輸入の禁止を唱える向きは、それが土地に恒久的に固定された農家の資本の一部の価値を損ね、あるいは消滅させるからだと言う。しかし商業の目的は生産の拡大にあり、生産が拡大すれば部分的損失があっても全体の幸福は増える。この論理を突き詰めれば、農業や製造業の改良や機械の発明はすべて止めるべきだという話になってしまう。これらは一般的な豊富さに、したがって一般の幸福に資するが、その導入の時点では、農民や製造業者が保有する既存資本の一部の価値を、必ず傷めるか、あるいは消し去ってしまうからである。

農業は他の産業と同様に、特に商業国では、強い刺激の作用の後には逆方向の反動が生じやすい。戦争で穀物の輸入が途絶えると、その結果生じる高価格により、土地に資本を投じることで大きな利潤が得られるため、資本が土地に流入する。資本の投入が進むと一次産品の供給が国内需要を上回り、供給過剰となって穀物価格は下落する。平均供給が平均需要と均衡するまで、農業部門には深刻な困難が続く。